

李 亦萱 (リ イセン)

中国出身

上智大学 文学部新聞学科

自分であることを選ぶとはどういうことか

これまでの人生でずっと「自分らしさ」を大切にしてきたから、卒業論文のテーマとしても中国若者がどうやってインボリューションから抜け出し、自分の本当の価値を生み出す道を選ぶのを研究している。

周りの人と違うことを選ぶのは勇気がいる。それは、多くのことを放棄する必要があることを意味している。例えば、固定観念、集団への帰属意識、安定した生活による安心感…決して簡単にできることではないので、ほとんどの人は適切に、あまりリスクをとらない生活をしている。それ自体はいいことだが、ただ、自分がやりたい、コミットしたいことがあると気づいたとき、現実をおそれずに、あえて選ぶべきだと思っている。

その前、他の奨学生に返事した時にも話したが、社会をより良くするには、一人ひとりが自分の本当の価値を発揮できることをし、社会全体の価値を高めていくことだと個人的に考えている。なぜなら、現在の資本主義社会の段階においては、多くの人は生産力の一部として、機械的な、創造的でない仕事をしていて、労働者自体も部品のようにいつでも置き換えられるような存在になっているからだ。それはマルクスが『資本論』で提唱した「疎外」という概念だ。つまり、人間が自ら作り出した生産物が、逆に人間を支配するよ

うな疎遠な力として現出すること。その中で人間が本来あるべき自己の本質を喪失した非人間的状態になってしまった。実際に今の私たちも、労働生産のための道具として、自分が作り出したものから切り離されている社会にいる。極端な例を挙げると、代理母出産のことだ。代理出産をした女性は、出産の道具として、自分が出産した子どもから引き離されることになる。もちろん、現実の合理性から見ればそこまで問題はないかもしれないが、母親と自分の子供に切り離される人間の感情・尊厳は無視され、それが苦痛につながるという点を現代人が軽視していると感じている。同様に、今の社会が仕事で抱える不安や苦しみの多くは、仕事の効率を満足させられているのに、自分の価値を実現できていないことや、それを生み出すときに得られる感情や尊厳に起因していると個人的に考えている。

先日、哲学者ハイデガーの著作を翻訳した出稼ぎ労働者についての中国の人物実話記事を読んだ。彼はわずかな給料で、1日工場で長時間労働し、生活は非常に苦しくなっている。しかし、記者が彼に苦しんでいるかと尋ねたとき、彼は「私は苦しんでいない。時間の長さは意義の長さと同じではないからだ」と答えた。つまり、彼にとっての一日の意義は、哲学書を読みながら翻訳するほんの数時間であったことである。

私は彼から、厳しい現実直面する前の人間としての精神力と尊厳を感じた。それが真に自分らしく生き、自分自身の価値を生み出す根源ではないかと考えた。

以上